ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

目　次

●戦後 70 年に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・1
●職員による平和講話スタート・・・・・・・・・・・・ 2
●講話終了と次世代継承をテーマにした報道について・ 2
●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2014 年度　ガイド向け講習会開催／教員のための「展示ガイドツアー」開催／春休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」開催／第 21 回日本平和博物館会議に出席／沖縄平和ネットワークとの意見交換会
● 2015（平成 27）年度のイベント・事業・・・・・8
●コラム　相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
●統計に見る 2014 年度・・・・・・・・・・・・・・・9
●仲宗根政善日記抄（51）・・・・・・・・・・・・・・11
●本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・13
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●資料館の動き（2014 年度）・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第 55 号
2015.5.31

戦後 70 年に寄せて

館長　島　袋　淑　子

今年は、第二次世界大戦が終わって 70 年の節目の年となります。

70 年前の 1945 年 3 月 23 日、ひめゆり学徒 222 人、教師 18 人は、看護要員として沖縄陸軍病院に動員されました。

当時の教育により、私たちは、軍に協力することは当然だと考えていました。戦場がどういうものかを全く知らず「神国日本は必ず勝つ」と信じ、自分たちの命が危険にさらされることなど想像すらしていませんでした。ところが、私たちは戦場の真っ只中に置かれ、動員された教師・生徒のうち 136 人、動員以外の教師・生徒 91 人、計 227 人が尊い命を失ったのです。

沖縄戦では「鉄の暴風」と形容されるほどの激しい砲爆撃が続き、沖縄の住民 12 万人余を含む 20 万人以上が犠牲となりました。

あの戦争の恐ろしさを語り継ぎ、平和の大切さを訴えることこそが、亡き恩師・学友への鎮魂になると信じ、1989 年 6 月 23 日、ひめゆり同窓会は、ひめゆり平和祈念資料館を設立いたしました。以来 26 年間、ひめゆり学徒生存者は「証言員」として、自分たちが体験した沖縄戦の惨状を伝え続けてきたのです。

現在、証言員は 80 代後半となり、事前予約を受けての体験講話は 3 月末で終了いたしましたが、館内での証言活動は今後も続けていく予定です。

昨今の社会情勢を見るにつけ、あの戦争が風化し、戦争への道を歩みつつあるような気配が感じられてなりません。今こそ「戦争は絶対に駄目」と声を大にして訴えたいと、この節目に改めて決意しております。4 月からは新たに職員による平和講話もスタートいたしました。後継者も育っていると確信しております。

これからもひめゆり平和祈念資料館は戦争の悲惨さを伝え、平和の尊さを発信し続けて参ります。皆様の変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

2015 年 5 月

職員による平和講話スタート

４月より、職員による「次世代の平和講話」がスタートしました。学校団体などを対象に、多目的ホールでひめゆり学徒隊の沖縄戦体験についてお話しします。

「次世代の平和講話」は、体験者の証言映像や写真などを使いながら、沖縄戦の戦場の具体的な様子をお伝えすることに加えて、ひめゆり学徒が当時どのように考えていたのか、また、戦後、沖縄戦をどのように振り返ってきたか、といった、体験者の心の動きにも焦点をあてた内容です。捕虜になるより死んだ方がいいという考え方や、戦場で傷ついた友達を置いていったことが生き残った人々にとってどのような意味を持っているのか、若い世代には想像しづらい事柄についてもわかりやすく説明します。

当館では、ひめゆり学徒の生存者である証言員を中心に沖縄戦を伝える活動を行ってきましたが、高齢化を見据えて、10年ほど前から後継者の育成に取り組んできました。講話を担当する説明員･学芸員は、30代～50代で戦争体験はありません。出身地、性別もさまざまです。体験者からの聞き取りやフィールドワークだけでなく、企画展や出版、来館者対応など、日々の仕事を証言員とともに行うなかで、ひめゆり学徒の沖縄戦体験を学び、証言員の思いに触れてきました。

「次世代の平和講話」では、生き残ってしまったという自責の念など、証言員が講話や展示では表現することが難しかった気持ちや、体験者の戦争や平和、命に対する考え方も伝えていきます。

説明員の講話を聞く証言員

学生への講話の様子

講話終了と次世代継承をテーマにした報道について

今年３月の証言員（元ひめゆり学徒）の体験講話終了に際し、報道各社による取材が殺到しました。１月から４月18日現在までの当館への取材依頼は、新聞８社、放送局７社、通信社２社、ラジオその他３社、海外メディア３社の計23社となります。

特に３月22日の学校団体向け最終講話には取材依頼が集中しました。生徒の皆様への配慮を各社にお願いした上で、９社が取材（講話の様子・終了後の館長への共同インタビュー）を行いました。通信社の記事が夕方に「Yahoo! ニュース」の国内カテゴリトップで報じられ、翌日以降、把握しているだけでも地方紙７紙が紙面またはサイト掲載を行っています。

戦後70年で沖縄戦への注目度が高く、戦争体験講話の終了は社会的にも大きな事柄として受け止められたようです。また、戦争体験を後世に引き継ぐことが重要な課題となっている現在、当館の次世代継承の取り組みについても関心が寄せられています。

「講話の終了」が「証言員の引退」と誤解されてしまった側面もありますが、報道に触れた方が当館へお手紙を寄せて下さったり、修学旅行での講演を思い出したりと、報道を通して、ひめゆり学徒隊や沖縄戦について考えるきっかけとなっているようです。

＊取材報道機関一覧（2015 年 1 月 1 日～ 4 月 18 日まで　計 23 社）

新　聞　社	放　送　局	通　信　社	海　　外	そ　の　他
琉球新報社 ＊ 3/23 1 面・社会面、3/25「社説」「金口木舌」 沖縄タイムス社 ＊ 3/23 社会面 3/30「社説」 朝日新聞社 毎日新聞社 読売新聞社 日本経済新聞社 北海道新聞社 西日本新聞社	NHK 沖縄 おきなわ Hoteye ニュースウォッチ 9 沖縄テレビ OTV スーパーニュース 琉球放送 THE NEWS 琉球朝日放送 Qプラス NHK 報道局社会部 クローズアップ現代 テレビ朝日 スーパー J チャンネル 報道ステーション NHK 国際放送局	時事通信社 共同通信社 ＊両社配信記事掲載 北海道新聞 神戸新聞 西日本新聞 日本経済新聞 福井新聞 中国新聞 東京新聞 Yahoo! ニュース	AP 通信社 ＊配信記事 シアトルタイムズ ジャパンタイムズ スター＆ストライプス ARD ドイツ公共ラジオ放送 オーストラリア放送協会 LATELINE	ラジオ沖縄（放送予定） NHK 第一ラジオ 沖縄発　戦後 70 年 ～さんごと考える平和 （職員出演） 日経ＢＰ社

※ NHK 国際放送局は海外向け情報発信局だが、 日本の放送局であるため、海外メディアではなく放送局に位置づけた。

館長による講話の様子

講話終了後の共同インタビュー

資料館トピックス

◆ 2014 年度　ガイド向け講習会開催

3 月 16 日、日ごろ沖縄戦を伝える活動に携わっているガイドのみなさまを対象に、「2014 年度ひめゆりガイド講習会」を開催しました。バスガイドの研修生から、外国語で案内する通訳ガイド、戦争体験者の平和ガイドまで、幅広い世代のさまざまなガイド 41 名の参加がありました。

第 1 部の「ひめゆり平和祈念資料館とひめゆりの塔ガイドツアー」では、4 グループに分かれ、当館の学芸員、説明員のガイドで展示室と塔周辺を巡りました。展示のキャプションには書かれていない情報や誤解されやすい点の説明を行い、参加者からの質問にこたえるなどしました。

第 2 部では、「証言員（ひめゆり学徒生存者）との質疑応答」を行いました。参加者からは、「当時はどんな髪型、服装がおしゃれだったか」、「アメリカ軍は憎かったか」、「家族は生き残ったか。どうやって会うことができたか」といった質問が出され、証言員がそれぞれの体験をまじえてこたえました。

第 3 部では、4 月から実施する「次世代の平和講話」を行いました。

参加者からは、「証言員の話を聞いて、戦争について『もっと知りたい、考えたい、伝えていきたい』という気持ちを持った」、「生存者の証言は、外国の方にとってもインパクトが強いです」、「職員の方々が熱心に説明して下さっているのに安心した」といった感想が寄せられました。

参加者に自己紹介を行う証言員

証言員による質疑応答の様子

資料館展示室でのガイドツアー

ひめゆりの塔でのガイドツアー

◆「教員のための展示ガイドツアー」開催

3 月 28 日、「教員のための展示ガイドツアー」を開催しました。学校の先生方に当館の展示を知っていただく機会をつくろうと、昨年 8 月に初めて開催しましたが、好評のため 2 度目の開催となりました。午前、午後と 2 回の開催で、12 名の参加者があり、県内の教員のほか、勉強を兼ねた旅行で来られた県外の方、大学で教えている方の参加もありました。

普段展示室で来館者に対応している説明員が、児童生徒の関心が高い展示を中心に 1 時間程度の展示ガイドツアーを行い、終了後に 10 分程度、質疑応答や事前学習に利用できる資料の紹介などを行いました。参加者からは、「身近に感じる具体的なエピソードがあって、生徒にも伝わると感じた」、「平和学習にどのように取り組んだらいよいか、ヒントがもらえた」などの感想のほか、「事前学習としてこれだけは知っていてほしいことをまとめたものがあった方がよい」などの提案もありました。

ガイドツアー後の質疑応答

ガイドツアーの様子

◆春休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」開催

3 月 21 日、22 日、29 日の計 3 日間、春休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」を開催しました。

当館では、元ひめゆり学徒が修学旅行などの予約団体対象に、戦争体験講話を行ってきましたが、2015 年 4 月からは「次世代の平和講話」という形で、説明員や学芸員が引き継ぐことになりました。このことが新聞やテレビで報じられると、多くの方から「戦争体験講話を聞きたい」という要望が寄せられました。そこで、急きょ実施することになりました。

毎回 70 名前後の参加があり、この企画のために県外から足を運んで下さった方もいました。参加者アンケートには、「いろいろな言葉や理屈でだまされることなく、真理を見失わないようにと、子どもに聞かせたくてきました」(38 歳／女性)、「現在、日本はまた戦争に向かっている様に感じます。子供、孫のためにも、戦争のむごたらしさを伝え、また私ももっと知りたいと思っています」(67 歳／女性) という声や、「戦争を知らない僕たち世代が、知るべき日がきているのはないかと思い、来館しました。恐い、ふるえがとまりません。僕も、この話を次の世代につなげていきます」(22 歳／男性)、「生の声を聞くことで、教科書だけではわからない沖縄戦を学ぶことができました。4 月から県外の大学へ進学予定で、自分の中でも沖縄で生まれ育った者としての使命を必死に探している途中でした。この講話は非常に大きな意味がありました」(19 歳／女性)、「心から戦争にならないよう、声をあげ学びたいと思う。次世代のためにうご

いてくれている背中を見て、これからをになう私たちも頑張っていきます」（21 歳／女性）など、これからは自分が伝えていきたいという若い世代の声も寄せられました。

2015 年 3 月 21 日の講話

2015 年 3 月 29 日の講話

◆第 21 回日本平和博物館会議に出席

2014 年 11 月 13 日・14 日の 2 日間、長崎県で開催された「第 21 回日本平和博物館会議」（開催館・長崎原爆資料館）に、館長の島袋淑子と学芸課長の普天間朝佳が出席しました。本会議は、年に 1 回国内の平和博物館 10 館が集まり、館運営や館同士の協力・連携について話し合う会議です。

今年の協議題は、「① 2015 年に巡回展示を行う」「②語り継ぐ取り組みについて」「③近年の平和に関する諸課題を展示内容にどのように反映させるか」の 3 つでした。①については、原稿データを各館で用意して、提案者である立命館大学国際平和ミュージアムがデザイン・製作する方向で進める、参加可能な館で巡回するということが確認されました。②については、各館から体験者の講話や証言映像の記録・上映、次世代の継承者の育成などの取り組みの報告がありました。③については、各館からテロや民族紛争、領有権争いなどの現代の紛争を展示にどのように反映させているかが報告されました。

会議後、長崎原爆資料館と国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、長崎原爆遺跡などの視察が行われました。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の視察の様子

会議での話し合い

◆沖縄平和ネットワークとの意見交換会

1 月 24 日、沖縄平和ネットワークとの意見交換会が行われました。沖縄平和ネットワークから 19 人、当館から館長の島袋淑子と職員 7 人が参加しました。

沖縄平和ネットワークからは代表の村上有慶氏が、当館からは説明員の仲田晃子が、修学旅行や平和学習などの現状などについて情報や意見交換を行いました。

村上氏からは、修学旅行の日数短縮による平和学習の希薄化や引率教員の平和学習に対する意識や熱意の変化などが指摘されました。仲田からは、教員も平和学習の必要性を感じながらどう取り組んでいいのか分からないのではないか、沖縄戦やひめゆりを知らない世代が増え、具体的に説明しないと伝わらなくなっていることなどが述べられました。参加者から、伊原第三外科壕と資料館をつなげてガイドする必要性の提示、「生き方に関わる資料館」という視点を持ったらどうかという意見や修学旅行生が多い時期の混雑対応への要望などの意見が出されました。

当館説明員の尾鍋拓美が、証言員の映像を使用した「次世代の平和講話」の模擬も実施しました。終了後、「映像を使用するのは良いと思う」「もっと証言員との関係が見える話をした方がいい」「経験を積むことが大事」など、同じく沖縄戦を伝える活動をしている仲間として、多くの意見やアドバイスを頂きました。最後に館長島袋から「いろいろといい意見を頂きありがとうございました。私たちはこれからも戦争は絶対ダメだというメッセージを発信し続けます」と感謝と新たな決意が述べられました。

意見交換会の様子

説明員による模擬講話

2015（平成 27）年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記のイベント・事業を計画しています。

○イベント
- ＊戦後 70 年事業「戦跡めぐり―ひめゆり学徒隊の足跡」（2015 年 7 月 11 日）
- ＊戦後 70 年事業「ひめゆり学徒と教師たち」展（仮）
- ＊戦後 70 年事業　夏休みひめゆりの全映像作品上映会
- ＊夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話
- ＊ひめゆり平和祈念資料館教員向け講習会（2015 年 8 月 5 日）
- ＊ひめゆり平和祈念資料館ガイド向け講習会（2016 年 3 月予定）

○事業
- ＊次世代職員の平和講話事業
- ＊ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行（2015 年 6 月 23 日）
- ＊出版
  『感想文集ひめゆり』第 26 号、『年報』第 26 号、「資料館だより」第 55 号・第 56 号の発行
- ＊ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業
- ＊ひめゆり平和研究所の設立に向けた準備事業

相思樹

ひめゆり平和祈念資料館の不思議

学芸課　古賀徳子

「前に資料館に来たとき壕の中に入ったんだけど、今は入れないんですか」。見学を終えた年配の方にこう聞かれることがあります。この質問にはうまく答えられた試しがないので、いつもどう答えたらいいか悩みます。

修学旅行で壕に入った世代にも見えず、「ひめゆりの塔の壕（伊原第三外科壕）ですか？戦後まもない頃の」と聞くと、「そんなに前じゃないです」とのこと。「海軍司令部壕ではありませんか」「違います」「沖縄陸軍病院壕では」「いえ、資料館で壕に入った覚えがあるので」「資料館には壕のジオラマしかないんです」といったやりとりが続きます。だんだん気まずい雰囲気になり、最後は相手の方が「前は壕に入れたのに・・・」と言い残して立ち去られます。最近は、外国の方にも同じ質問をされました。みなさんが口をそろえて「資料館で壕の中に入った」とおっしゃるのです。

これは一体どういうことなのか、展示室で考えていると、高校生の会話が聞こえました。「ここって地下？」「外の壕とつながっているの？」。そう言われてみると、次第に暗くなる照明や壕の実物大ジオラマ、窓から差し込む光など、まるで暗い壕の中に入って、外に出て来たような印象があります。資料館の構造に、こんな工夫が凝らされていたのかと大発見した気分になりました。でも、また同じ質問を受けたとき、こう説明しても納得はしてもらえなさそうです。

統計に見る２０１４年度

※小数点第 1 位を繰り上げているため、合計が 100％でない場合もある。

1．総入館者状況(入館料免除を除く)

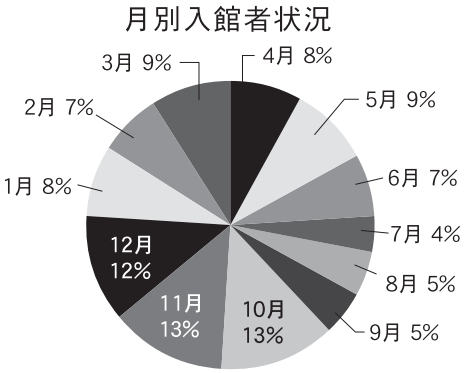
・昨年の入館者は 629,440 人（前年の 660,374 人より 30,934 人減少)。1 か月の平均入館者は 52,453 人、1 日平均は 1,743 人（慰霊の日、台風休館除く 361 日)。うち外国人は 5,323 人。
→開館以来 26 年間で 25　番目の入館者数。

・開館以来 26 年間の累計は 20,430,936 人で、年平均入館者数は 785,805 人、1 日平均は 2,184 人（ただし、1989 年度の開館期間は 9 か月間)

2．月別入館者状況

・昨年 1 年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの 10 月～ 12 月の 3 か月間。3 か月間の合計は 243,688 人で、総入館者数の 38％（小数点以下を四捨五入。以下同じ)。

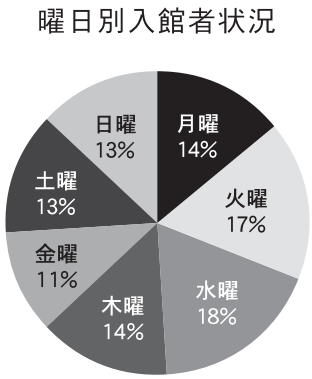
・入館者数が少ない時期は 7 ～ 9 月。3 か月間の合計は 92,125 人で、総入館者数の 16％。

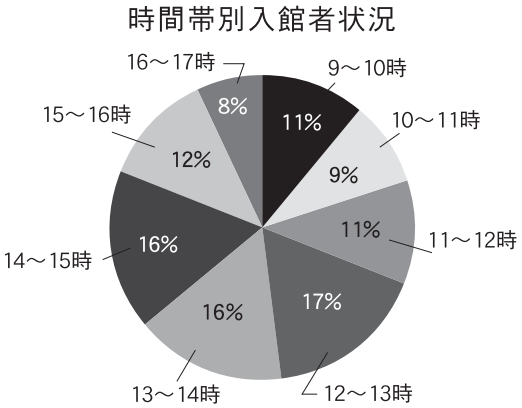


3．曜日別入館者状況／時間帯別入館者状況

・曜日別では、週半ばの火・水に集中している。
曜日別：月 14%、火 17%、水 18%、木 14%、金 11%、土 13%、日 13%。

・時間帯では、12 時台から 15 時台までの午後の早い時間帯が少し多い。



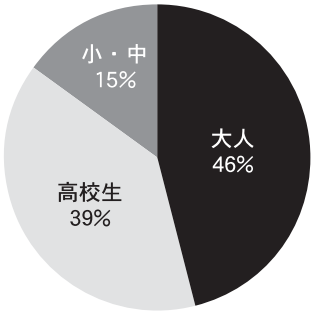


4. 類別入館者数

【総数】入館者の割合は、大人が 46%、高校生 39%（そのうち 98%が団体で入館）、小・中学生 15%（そのうち 75%が団体で入館）。26 年間の平均では、大人が 65%、高校生 24%（そのうち 95%が団体で入館）、小・中学生 11%（そのうち 64%が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が 68%と高く、次いで小・中学生 20%、大人 12%となっている。

類別入館者状況（個人・団体含む）



5．学校団体の入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2,183 校、314,928 人（前年の 2,242 校、317,554 人に比べ－ 59 校、－ 2,626 人）。内訳は、小学校が 104 校で 5%、中学校が 698 校で 32%、高校が 1,381 校で 63%。

【都道府県別】

・小学校　沖縄 50 校、鹿児島 26 校、東京 6 校の順に多い。

・中学校　大阪 79 校、兵庫 79 校、岡山 76 校、奈良 50 校の順に多い。

・高校　東京 183 校、神奈川 137 校、埼玉 94 校、千葉 88 校の順に多い。

・沖縄の中学・高校の全体に占める割合は、それぞれ中学 3%、高校 0.4%

【月別】

・10 月 16%、12 月 16%、5 月 16%、11 月 15%の順に多く、4 か月間で全体の 63%を占める。

・小学校　6 月 30%、5 月 20%、11 月 15%の順に多い。

・中学校　5 月 38%、4 月 21%、6 月 13%の順に多い。

・高校　10 月 23%、11 月 19%、12 月 19%の順に多く、3 か月間で全体の 61%を占める。

6．入館料免除

入館料免除総数　37,578 人

・団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	157 団体	8,784 人
・学校団体引率者		20,862 人
・修学旅行下見	655 校	1,537 人
・個人免除者（身障者手帳等提示の方）		3,944 人
・慰霊の日（6 月 23 日）		2,451 人

※沖縄県内学校団体は、入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

仲宗根政善日記抄 (51)

〔1980 年〕四月二日

衆院に安保特別委が新設されて、もと防衛庁長官坂田道太が委員長、沖縄側から国場幸昌氏、基地容認の自民党、上原康助社会党、玉城栄一公明党議員が委員にはいる。与党十三、野党十二、一委員の差があるが、この差は極めて重大だ。

自民党の防衛問題を追認する結果になるおそれが多分にある。

大木外相は、先に訪米して、米国の「着実かつ顕著な防衛（steadily and significant)」のパロー米海兵隊総司令官の要請に答えて、「着実な増強には努力するが、顕著な増強はむずかしい」と答えた。しかし細田防衛庁長官は、「いろいろの困難はあるだろうが、克服するよう努力する」と答えている。

衆院安保特別委員会の設置といい、細田防衛庁長官の発言といい、日本は明らかに軍備拡充の政策へと一歩一歩前進しつつあることが、原子力潜水艦の自由に出入りしている沖縄では敏感に感じられる。日一日と戦争を知らない世代はふえて、国のこのような動きには極めて鈍感である。昨日は三十四年前、米軍が嘉手納に上陸した沖縄人にとっては忘れがたい日である。沖縄の若い世代もこのうららかな春日にあのいまわしい日を思い出すのはもういない。

一中健児之塔で、元沖縄県立第一中学校長藤野憲夫先生の顕彰碑除幕式があった。一中同窓会が中心になって催しているかと、出席したのだが、首里高校の校長や同窓会は、ただ招かれただけで、主催は、静岡県大東町の観光団が中心になって行った。（中略）

戦争がはじまろうとする直前、私は先生の儀保のお宅にお訪ねして、ゆっくりお話を承った。奥様は、すでに静岡に疎開させて、お一人暮しておられた。壁には樹陰の中に静まりかえった園比屋武御嶽の石門の絵がかかっていた。せまり来る沖縄戦を前にしてしんみりと話してわかれたのが最後になってしまった。最後の最後まで生徒と行動をともにしてなくなられたのである。教師たる者の範を示されたのである。

生徒とははなれて行動していた西岡一義部長と、立話をしているときに、砲弾で負傷されて、伊原第一外科壕にかつぎこまれ、女学生たちのあつい看護をうけながら息をひきとられ、つぎつぎと戦死して行った女学生たちと同じ弾痕に埋められた。生き残りの一中鉄血勤皇隊の隊員によって、遺骨は丁重に拾われて、奥様のところにとどけられた。

伊原第一外科壕跡に、私は藤野先生の最期の地ともしるして説明碑を建立しておいた。

四月三日

正午から八汐荘で、藤野ふぢゑ先生の歓迎会が、催された。昭和十五年の卒業生から最後の卒業生まで集まり、各人自己紹介をかねて、在学時代の思い出や、先生の印象、歓迎のことばを述べていた。（中略）もう皆中年で、社会経験もへており、しっかりしていて、その話しぶりも一人一人個性味豊かで、聞いていてこころよかった。

一高女は名門校として知られて、その伝統にほこりを持っていた。教師と生徒、生徒と生徒の間に、深い信頼があり、なごやかな雰囲気につつまれていた。その母校は灰燼に帰し、校風も伝えられないままに消滅してしまった。ただ同窓生の中にのみいきとして今ものこっている。

戦争をくぐって、卒業生は一層きたえられた感じさえある。

宮里〔千代〕さんが立って自己紹介をした。宮里は、昭和二十年一月二十二日の大空襲で、練兵場わきを流れる小川のへりに造られた蛸壺壕の中に生き埋めされた生徒であった。

十九年の十十空襲のときは、爆撃が那覇市内に集中されたが、翌年の一月二十二日の空襲は、那覇近郊に及び、女子部一高女もねらわれた。運動場にも数発の爆弾が投下されて、兵隊が負傷した。図書館南側にも落下したが、さいわい、建物はゆがんだだけで破壊はまぬかれた。体育館のステージの上に大きな不発弾がつきささったままであった。部長住宅のすぐ西隣りに軽便鉄道の堤下に暗渠があって、防空壕代りに使用していた。一高女の大部分が西岡校長もいっしょに待避していた。ところがその西入口のわずか数米先に、爆弾がおちた。もし遮蔽がなく、もっと近くに落ちたなら、戦争がはじまらず、既に多くの犠牲者を出すところであった。皆は命拾いしたとほっとしていた。

寄宿舎にも二、三発、爆弾が落ち、一部は破壊された。後、軍の工作隊がこの破壊された資材を、南

風原陸軍病院に運び、三角兵舎を造ったのであった。

三月二十四日、南風原病院に移動を命ぜられて、生徒たちは、この三角兵舎に最初の一夜をあかした。（中略）三月二十九日に、この三角兵舎で、最後の卒業式が行われた。港川からの艦砲が地軸をゆるがしていんいんと轟音の聞える中で、監視の生徒を屋外に立たせて、式はとり行われた。三角兵舎内は前面の低い机の上にわずか二本のローソクがともっているだけであった。生徒たちは、最後のときのよそいとして、皆制服を持っていた。くらがりにしんと座っていて、ローソクの光に照らされながら、温顔に悲壮な表情をうかべて、こんこんと最後の訓辞を述べたのである。生徒たちは一語もききもらすまいと、涙をにじませて聞きいっていた。西岡部長の鼓舞激励の訓辞がすんで、海行かばを斉唱した。悲壮身にしみ、涙を流していた。

宮里が立って自己紹介をしている間、私は、戦争中のことばかりを思い浮べていた。

宮里と古見キヨ二人が蛸壺壕で生埋めになった。練兵橋を越えると、練兵場があり、はるか東の方に、ローレライとも称し、雲雀が丘ともいっていた丘があった。（松川小学校西側、屋良朝苗氏宅そばの丘）その丘のま下に監的壕があって、（現在屋良氏門のあたり）射撃訓練が行われていた。そのわきに小川が流れていた。（現在、上をおわれてそばに梯梧を植え、西側は子供の遊び場になっている。）この川べりに沿うて、生徒たちが避難の蛸壺壕を掘ってあったのである。寄宿舎からここまでのがれて来て待避したのに、とうとう悪運がつきまとっていたのか、ここに爆弾が投下されたのである。今自動車でアスファルト道を疾駆している人々は、こんなところに沖縄戦争の始まる前に、爆弾が投下されたと話しても、おそらくうそのように感じるであろう。

宮里、古見は掘出してみると、無傷であった。さっそく病院に運ばれはしたが、精神的なショックを受けただけだった。古見は、学徒隊に参加し、いくたびか生死の境を彷徨した。人間の命は全く不思議なものである。宮里の元気そうな顔をみつめているとあのような体験をへてきたとは思えないあかるい表情であった。

四月〔日付なし〕

一九五六年七月二十八日、那覇高校運動場で、四原則貫徹島ぐるみ闘争の県民大会が催された。全県民があれほど盛り上り、米軍の一括買い上げに反対して、決起したことはなかった。琉球大学学生も先頭に立って、反対し、ヤンキーゴーホームを叫んだというので、六名の退学、一人の停学を軍から強いられて、ついに煮え湯を飲まされた。しかし県民の総意で、一括買い上げは阻止されて、先祖伝来の土地はようやく確保された。

復帰時には、軍用地が土地所有者に返還されるべきものが、米軍基地をそのまま存続させるために、あらたに法令を設けてそれを阻止している。反面、軍用地代十倍にもあげて、軍用地を確保するための策を弄している。一部の軍用地反対地主を除いて、多くの地主たちは、高価な地代に満足して、現状を容認する状態になって来た。

ところが、地主の中には、生活困窮者が出たり、事業に失敗するなどして金につまり、土地を防衛施設庁に売り渡しつつある。昭和四十七年（復帰時）にはわずか一千平方メートルの売渡しだったのが五十四年度には初年度の五十三倍にあたる五万三千平方メートル（約一万五千九百坪）になったという。これらはいわば、永久軍用地であり、再び平和な農民の耕作地にはかえられないのである。人殺しの訓練所をして永久に使用されようとしている。

一方、基地を容認し、原子力潜水艦の自由に寄港するようになり、さらに積極的に軍備拡張の方向に、日一日とすすみつつある。毎日毎日の新聞はあきらかに、一歩一歩この方向へ動きつつあることを報じている。まさにおそるべきことへと刻々動いている。沖縄は、ただこの運命をになって流れるままに流されてよいのか。県民の一人一人が、今、世のすすみつつある方向をじっとみつめて、平和の方向へとすすむ努力を積みかさねて行かなければならない。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
　旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。
※〔　　〕は編集で補った。

本　棚

元琉球大学教授　仲程昌徳

蟻塚亮二著『沖縄戦と心の傷　トラウマ診療の現場から』

フィリピン・ミンダナオ島ダバオには多くの沖縄移民がいた。彼らは、アメリカ軍が上陸してきた時、取るものもとりあえず、タモガンの山中に逃げ込んだ。やがてその多くが、飢えと病に苦しみながら亡くなっていったが、生き残った人々の中には、山中でわが子を見失ってしまったのもいた。

沖縄に引き揚げてきて数十年たち、生活に余裕ができた頃から、亡くなった人々を供養する慰霊の旅がはじまる。その中には、見失った家族を探すために参加する人々も見られるようになるが、妹を探すために慰霊団に参加した男の行状を書いた短編があった。崎山麻夫の「ダバオ巡礼」である。

また、旧南洋群島パラオに住んでいた一家の母親が、引き揚げてきて数十年たったのち呆けてしまう。子供たちが、母親の「呆けを治すため」に、かつて住んでいたところに母親を案内する、といった作品もあった。大城貞俊の「パラオの青い空」である。崎山の作品に登場する、避難先で見失ってしまった妹を探す男の行状は、尋常一様のものではなかった。そして大城の作品に登場する母親の記憶は、詳細を極めていてとても呆けているとは思えないものであったが、男の行動は「相互依存的な親子関係」、母親の記憶の噴出は「痛みを伴う記憶に限って言うと、認知症になることによって『記憶は良くなる』のである」といった視点を借りることで、男のありようが、普通でないとはいえないものであり、また母親の記憶の噴出が、まったくありえないものでもないとして理解できるようになっていく。トラウマの考察は、ことほどさように、これらの作品を読むのに、大きな示唆を与えてくれるものとなっていた。

沖縄で書かれてきた多くの戦争作品を読むにあたって、大きな示唆を与えてくれるに違いないものとして蟻塚亮二の『沖縄戦と心の傷　トラウマ診療の現場から』はあるが、それは、言うまでもなく小説作品を読むために書かれたものではない。

蟻塚の著書は、沖縄戦と精神的な疾患がどのように関係しているか、そして彼らの心の傷を癒すにはどうすべきか、その対し方と治療薬等について書いた、現場からの報告である。そこには、沖縄戦がいかに大きく体験者はもちろんのこと、第二、第三世代にまで影響していくのかが考察されていた。数十年もたって、なぜ沖縄ではそのような蟻塚自身が名付けた「晩発性 PTSD（心的外傷後ストレス障害)」に悩まされるのか。

蟻塚はそのことに関して「『本土』における『敗戦や終戦』という言葉は過去形である。しかし、沖縄県民にとって沖縄戦の記憶は現在進行形であり、六〇年前という過去のことでありながら、米軍基地やそれにまつわる事件や過重な基地負担と連なる、熱く、予断を許さない『今の出来事』なのである」という。それは、また先に見た沖縄の作家たちが、そして沖縄の作家の誰もが戦争と関わる作品を書いているのは何故なのかという問いへの答えともなっていた。沖縄で書かれている戦争作品が、日本本土で書かれている戦争作品とはおのずから一線を画すものになっている由縁がわかるものともなっていた。

繰り返しになるが、蟻塚は、沖縄の戦争作品を読むために、これを書いたのではない。蟻塚は、沖縄における「少年非行と精神病多発はともに戦争トラウマによる車の両輪ではないかと疑っている」こと、「沖縄の犯罪事件の衝動性、高い DV 被害、自殺、DV による接近禁止命令違反率の高さなども、沖縄戦と基地被害のトラウマとの関係がある」として、研究で見据えてきたものを報告していたのである。

蟻塚は、しかし現場の報告をするだけで終わりにしていたのではない。沖縄の「少年非行と精神病多発」は、日本政府の沖縄に対する過去から現在に至るまでの差別と無関係ではないと政府を告発していくとともに、振り返って精神科医のありかたについての自戒をも忘れてなかった。

蟻塚は「政府や官僚・行政に対してもっぱら服従してきたことが、先の戦争を招いたのではないか。だから政治や社会の動きに傍観者でいることこそ許されないと思う」という。また「沖縄戦体験者の高齢化は自然現象であるが、戦争を語る土壌が保守化して、戦争を語れなくさせる世論こそが『記憶を風化』させている。そしてこれは人文学的な事象である」ともいう。心に銘ずべき言葉である。

声

息子に沖縄の過去の歴史を知ってほしいと資料館へ

岡山県　男性

はじめてお便りさせていただきます。

昨年の夏休みに、夫婦と中学２年生の息子との３人で貴資料館にお伺いさせていただきました。

家族全員、沖縄が大好きで何度か旅行しましたが、子供も大きくなり親と一緒に行動するのがイヤになってくる年ごろになりました。そして、今年はおそらく最後の沖縄旅行になるだろうと思い、貴資料館にお伺いさせていただきました。そろそろ自分で色々な事を見て聴いて考えることができる年ごろになっただろうし、楽しいだけの沖縄だけではなく、沖縄で過去にあった歴史を知ってほしいという思いがありました。

幸い本人も色々と考える所があったようでして、このたび中学校内で開催された弁論大会で沖縄での経験を発表したようです。残念ながら、優秀賞ではなかったようですが、先生方や多くの生徒さん達に思いを伝えることができたとのことでした。

つきましては、ひめゆり平和祈念資料館様にそのときの原稿をお送りさせていただき、子供に大切な経験をさせていただいた御礼に代えさせて頂きたいと思います。

また、開館当初から行われてきた元ひめゆり学徒の方による講話が終了したとのこと。大変残念ですが、皆様におかれましてはこれからも何卒平和の尊さを伝える大切な役割を続けていただきますよう、心よりお願い申しあげます。

資料館の動き（2014 年度）

2014年４月１日	消費税率引き上げに伴う入館料値上げ
６月23日	第 69 回ひめゆりの塔慰霊祭挙行／開館 25 周年
７月18日	開館 25 周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち」開幕（2015 年３月 31 日まで）
８月９日	教員のための展示ガイドツアー開催
７月31日～８月３日／８月20日～24日	夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」
８月15日	2014 年度教員向け講習会開催
８月23日	2000 万人目の入館者
11月12・13日	第 21 回日本平和博物館会議に出席
2015年１月24日	沖縄平和ネットワークとの意見交換会実施
３月16日	2014 年度ガイド向け講習会開催
22日	修学旅行生への最後の戦争体験講話実施
31日	事前予約を受けての戦争体験講話事業終了

資料館ガイド

◆平和講話・証言ビデオ・アニメ視聴ご案内

ひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約 45 分)、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。下記の時間でご予約下さい。

【講　話】		10：00	11：00	12：00	13：00	14：00	15：00	
【ビデオ】	9：10	10：00	11：00	12：00	13：00	14：00	15：00	16：00

※お電話にて空き状況を確認後、FAX かメールにて申込書をお送り下さい。

※ビデオ作品　○証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」(25 分)
　　○アニメ「ひめゆり」(30 分)

※毎週月曜日・年末年始（12 月 30 日、31 日、1 月 1 日～ 3 日）・旧盆（旧暦 7 月 13 日～ 16 日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6 月 21 日～ 24 日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

●最大収容人員：200 人（席）

●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

●多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

●予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせて頂くこともございます。

◆ＶＴＲ室のご利用について

下記のビデオを視聴することができます。

◇「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」(25 分　1994 年)
◇アニメ「ひめゆり」　(30 分　2012 年)
◇「ひめゆり学徒の戦後」　(33 分　2003 年)
◇「仲宗根政善～浄魂を抱いた生涯」　(30 分　2001 年)
◇「戦火に消えた 21 の学園」　(26 分　1999 年)
◇「生き残ったひめゆり学徒たち」　(28 分　2012 年)

多目的ホール

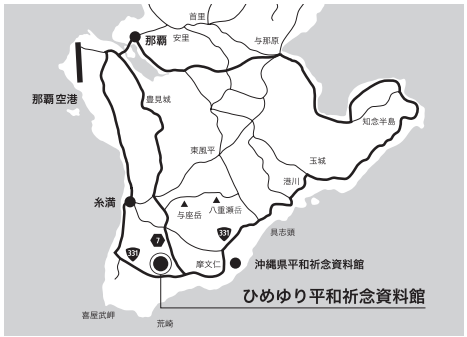
◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前 9 時～午後 5 時（閉館は午後 5 時 25 分)
②休 館 日　年中無休
③入 館 料　大人￥310　高校生￥210　小・中学生￥110
　　団体料金（20 名以上）　大人￥280　高校生￥190　小・中学生￥100
④交　　通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約 30 分、
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約 15 分、
ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約 4 分、
赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に乗車し、約 20 分。
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え、約 15 分、
ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分



ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 55 号
2015(平成 27)年 5 月31 日発行
編集・発行　公益財団法人　沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立　ひめゆり平和祈念資料館
〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100
URL　http://www.himeyuri.or.jp/